

第六章 国際貢献のために求められる人的資質とは

シビル・ソサエティは国際共通語

シビル・ソサエティ（「市民社会」とでも仮訳）という言葉がわが国で使われはじめてから余り時間は経っていないが、それが既に“国際共通語”になっていることをここに来て痛感する。つまり、米国の社会学者レスター・サラモンが唱える「連帯革命」(注74)は国境を越えて世界の最貧国のひとつといわれる東ティモールにまで広がっている。シビル・ソサエティの役割が“社会と政府の橋渡し(注75)”と定義されるこの国には、その数500にも達する（但し、かなりの数の国内NGOは休眠状態にある由）非政府組織（NGO）が活動しているという。因みに、人口1億2千万人強のわが国でNGOの登録数が1万件に達したのはつい一、二年前のことである(注76)。独立に際して制定されたこの国の憲法の中にはNGOの権利を認める条項が盛り込まれている(注77)が、それほど先進性(?)が見られるのも、21世紀最初の独立国家たる所以であろうか。

ここで展開された平和維持活動がそうであるように、シビル・ソサエティの大きな担い手であるNGO、ボランティア活動にも幾つの特徴的な変化が観察されるのは面白い。その一つが緊急時の人道支援から、より中長期を見据えた開発支援への移行である。また、国連主導の国造りに連動してか、複数政党制の助成や民衆による行政監視能力の養成等を企図した民主化推進、人権擁護、さらには女性の権利（ジェンダー）の伸長等、一定の価値観に立脚した社会の実現や“平和の文化”の定着を目指す動きも目新しい。最後に、国内NGOと国際NGOとの在るべき関係についても連携か、競合か、まだまだ試行錯誤の段階にあるようである。

わが国NGOの“腰を据えた”活動

緊急時の人道支援のためにピーク時にはかなりの数のボランティアやNGOの人々がわが国から駆けつけて活躍した。現在でも国造り支援のために、その数は決して多くはないが“腰を据えた”試みが進行している。例えば、この国の指導者が強く望む農民に対する技術教育、無医村での医療診察や衛生・健康知識の普及、村落の所得力向上のための生産改善指導、

さらには、コミュニティ意識形成のための共同トイレ敷設支援等々、多様である。それぞれの規模は何れも大きくはないが、複雑多岐なニーズに対してNGOならではの木目の細かい公共サービスが提供出来るのは心強い。また、他のNGO、ボランティア乃至は国際援助機関等とも連携（ネットワークリング）して、その結果、それぞれの役割が強化され全体として大きな力を生み出している。

私は、着任以来時間の許す限り現場を訪れることにしているが、そのお陰で東西南北、島内をほぼ走破した。首都ディリで生活をはじめた当初は、なんと不便な地に来たものかとショックを受けた点は告白せざるを得ない。しかし、日本人の活躍する各所を尋ねる中で、「あんな大都会（？）には目が眩む」と言い切る女性に出会った時には、その逞しさにただ脱帽するばかりであった。この他、大学での教職を辞して、神に召されてと云って山間僻地で布教に励み、コミュニティ作りに精を出す神父、既に三回マラリアに罹っても自分の信ずるところを頑なに貫き通す二人の女性等々、書き出すときりがない。

“居場所”をみつけた人たち

私は以前から、国際貢献のために求められる人的資質とは何だろうかとよく考えることがある。ここで出会った人たちを思い浮かべてみると幾つかの共通点があることに気がつく。第一に、当然のことながらその土地の言葉が操れることである。六十も半ばを過ぎた先の神父の場合、テトゥン語（現地語）を数ヶ月の特訓でマスターしたという。厳しい生活環境ゆえに忍耐力、また、不測の事態に自ら対処できる沈着さも挙げられよう。第二に、確固とした活動基盤を築くためには、土地の有力者、管区の教会等とも予め相談し認知してもらおう努力は欠かせない。このような政治的なセンスと手腕も重要である。第三に、私も現場で何度も目撃したが、土地の人たちから“あいつら（注78）”という差別的な目ではなく、彼らにとって無くてはならない生活の一部として受け止められることも必要である。つまり、コミュニティのニーズの中に巧く嵌（はま）ることであり、そうすれば、住民からも喜ばれ、信頼されることになる。

最後にもうひとつ重要なものがある。ここで活躍するひとびとを見てつくづく感じることは、自己犠牲を強いられても後悔しない何かがあるよう

である。それは彼らにとっての“居場所”と云ってよいのかも知れない。それを見つけた人々は皆目が据わっており、言葉がしっかりしているのはその所為であろう。当地勤務で学ぶことが出来た貴重な経験のひとつである。

————— * ————— * —————

その後、本稿（『国際貢献のために求められる人的資質とは』）の当初版が『外交フォーラム』に掲載されたあとの編集委員会議で、“居場所を見つけた人びと”について、いい表現だとの意見が委員の中から出されたらと編集部から連絡を戴いた。

ところで、私が現地で知り合ったボランティア活動で活躍された諸兄はその後、その多くは東ティモールを去ったが、ケニア、フィリピン、沖縄をはじめ、各所で引き続き活躍している。中には、過酷な東ティモールでの生活環境下での無理が祟ってその後大病、療養を余儀なくされたボランティアの方も何人かいる。今年はじめ、その後も東ティモールに留まり、六回目の正月を現地で迎えたとする邦人女性のボランティアの方から年賀の便りをいただいた。それによると、昨年（2006）の騒乱事件で子どもたちが再び心に傷を負い、彼らの将来が非常に心配であると末尾を結んであった。私は、彼女の自己犠牲を厭わない人生がこの先まだ続くことを思うと正直複雑な心境である。ケニアから戻った別のボランティアの女性からも長文の便りをいただいた。ボランティアとして各所で経験を重ねて一層逞しくなっていく彼女の姿が目に見え。さらには、私と一緒に働いて助けてくれた後一旦日本に戻り、休学していた大学院での学位を習得して、気持ちを新たに再度東ティモールにわたり、混乱の中で現在子ども支援のプロジェクトを立ち上げて頑張っている若者もいる。次に会った時には彼ももっと大きくなっていることを直接私自身の目で確認出来ようが、いただいたe-mailの文面からも既にそのことが窺い知れる。

上記三名から戴いた便りを私なりの責任と判断で、以下に（プライバシーに触る点は削除した上で）掲載することとしたい（参考資料1参照）。というのは、読者の方々が、主題である“国際貢献に求められる人的資

質”が如何なるものであるのか、その手がかりをこの中から直接読み取れると考えるからである。私は国連が現在世界の18箇所で展開しているPKO活動^(注79)で働いている軍事要員を除く邦人の数が20数名と聞いて、あまりにも僅少な数に正直驚いている。このことから、彼らは貴重な人材であり、大事にしたいものである。

(参考資料 1)

=====
(その 1 — 東ティモールにとどまる女性から)

みなさま

新年明けましておめでとうございます。

旧年中は大変お世話になりました。

メールにて失礼ではありますが、賀状を送らせていただきます。

東ティモールで迎える新年も6回目となりました。

去年はディリの情勢不安により、

東ティモールではまたたくさんの死者が出ました。

99年以前の不安に満ちた時代を知らない子どもたちが、

あらたな暴力に満ちた日々を身近にし、

絶え間ない暴力の連鎖の中を生きていくことになるのでは、

と心配しています。

本年もどうぞ、よろしく願いいたします。

=====
(その 2 — ケニアから戻った女性から)

旭様

覚えていらっしゃるでしょうか、2004年7月まで東ティモールの
県で の保健教育プロジェクトをしていました です。

久しくご無沙汰いたしておりますが、お元気でいらっしゃいますしょうか？

先日、 のジュニア専門員、また外務省草の根外部委嘱員として東ティ

モールへ赴任されていた　さんと電話で話した際、そういえば我々2人も東ティモールで大変お世話になった旭さんは今どうしていらっしゃるのだろう、という話になり、お便りさせていただきました。

私は去年、別のNGOから　の　事業でケニア西部地域へ行き、母子保健プロジェクトの立ち上げに、調整員とコミュニティ活動のTechnical Advisorとして従事しておりました。内容的には、かなり納得のいくプロジェクトが立ち上がったのですが、諸事情でかなりの激務となり、今年の3月末にケニアを離れ、現在はフィールドでのプロジェクト運営からはしばらく遠ざかっています。久しぶりに時間的余裕もできたので、これを幸いと、今までの仕事のまとめや、プロジェクトマネジメントの体系的な勉強、語学のブラッシュアップ等、それに日本の美しい四季の移り変わりを楽しんでいます。が、1年間のみとはいえ、ケニアはなかなか愛着を持った国ですので、また機会があれば戻りたいと思っています。

今年起こった東ティモールでの内紛は、とても残念なことでした。退避勧告で日本に戻ってきた　さんや　の現地スタッフに会って色々話を聞くことができましたが、やはり国が国として成立していくことは、国土の大きさに関わらず大変なことなのだ実感いたしました。

東ティモールとケニアで保健プロジェクトの運営に従事したわけですが、東ティモールでの3年間の経験が下敷きとなってケニアでの凝縮した1年を乗り切ったような気がします。ケニアは東ティモールに比べれば、国家成立からある程度の年月を経ており、サブサハラ・アフリカでは優等生と言われていきますので、格段に違うだろう！と思っていたのですが、保健省の公式組織図が存在しない（ドラフトのようなものは存在しますが）、など、ある面ではUNの手が入った東ティモールの方がちゃんとしているのでは???と驚いたこともありました。中央・地方省庁両者との適切な関係作りの難しさや、マネジメントの問題は程度の差こそあれ、両国共通でした。ただ、東ティモールで一番苦勞したことは、人事といいますが、東ティモール人スタッフと一緒に仕事をしていく為に必要な信頼関係を築くことだったのですが、ケニアではこれがティモールと比べると非常に楽だったと思います。大変、主観的な見方ですが、ケニアで1年かけて成立す

る関係は、東ティモールでは3年かかるのではないかと。

長々と書いてしまい、申し訳ありませんでした。旭様は現在お身体の調子はいかがでいらっしゃいますか？

季節の変わり目で風邪などひきやすい時節です。お身体、ご自愛ください。

=====
(その3 — 東ティモールに再び戻った若者から)

旭 大使 どの

拝啓 旭大使におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

東ティモールの にございます。大変にご無沙汰しております。こちらに参りましてから、まもなく5ヶ月になります。一から立ち上げたコモロ地区でのユースセンター運営プロジェクトも、何とか軌道に乗せることができました。職業訓練、英語、識字、スポーツクラブの各コースも順調に進んでおりますし、毎月開催しているスポーツ・トーナメントにも1,000人以上が集まる規模までになりました。ディリ市内の治安状況は、依然として不安定ではありますが旧コモロ・マーケットの周辺は随分と落ち着いたのではないかと日々仕事をしながら感じております。

日本大使館の 、 にも非常にお世話になっております。特に におかれましては、休日の際には我々の開催しているイベントに何度も足を運んで頂いており、大きなご理解を頂いております。これも日本からの出発前に旭大使にお会いすることができ、ご支援をして頂いた故の結果であります。心からの感謝を申し上げます。大変にありがとうございました。

私自身の契約は7月までとなっておりますので、残された期間をこちらの青少年たちの健全な育成に向けた活動に全力で取り組んでいきたいと思っております。

旭大使のますますのご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。

敬具

(参考資料2)

ノートルダム清心女子大国際教育フォーラム 「国際社会と平和—世界に平和を」 紛争を克服 平和実現へ

／掲載日：2006年11月5日／紙面：山陽新聞朝刊／掲載：15ページ／

「国際社会と平和—世界に平和を」と題したノートルダム清心女子大の第十回国際教育フォーラム（山陽新聞社共催）が岡山市伊福町の同大カリタスホールで10月28日、開かれた。上智大外国語学部教授のデヴィッド・ウェッセルズ氏（国際関係論）は紛争の背景にある宗教的対立に触れ「互いの価値観を尊重することが平和に必要」と指摘し、駐東ティモール大使を務めた外務省特命全権大使の旭英昭氏は「詳しく伝えられていない国際貢献の中身にも目を向けて」と強調。学生ら約六百人が平和実現への道筋を考えた。

(講演題目) 国際貢献に求められる人的資質とは —平和構築の現場で考えたこと 現地への適応力必要—

東ティモールは日本の真南にあり、長野県ほどの面積で人口は百万人弱。宗教はカトリック。主産業は農業。

東ティモールがどんなところか、五つ“ないもの”があるといえば、イメージを膨らませやすい。まずはエレベーター。エレベーターが必要な建物は、占領していたインドネシアが1999年に引き揚げるときにすべて焼き払われた。交通信号機がなく、山岳地帯なのにトンネルがない。また、通貨がなく、日常生活は米ドル。それに、最後に落ちとして、日本との時差がない。

私事だが、昨年6月に現地で病気にかかり、シンガポールの病院に搬送

された。砂ぼこりのフィールドに出掛ける日々で、バクテリアを何らかの形で吸い込んでしまったため、呼吸困難に陥り、熱が出たのだ。1999～2004年ごろは、各国のPKO（国連平和維持活動）部隊が現地入りしていたため医療施設があったが、今は全くない状況だ。

独立後、東ティモールの情報がほとんど出なくなった。国際平和活動に関する報道は、紛争の火を噴いているときは華々しいが、実際は報道が途絶えて以降の努力が国際平和の目標を達成する上で大変重要なのだ。

私が2003年7月に東ティモールに臨時代理大使として発令された当時、日本国内の関心はイラクに移り、現地のニュースはほとんど流れてこなかった。しかし、現地赶赴してみたら、想像以上に日本の支援が現地のコミュニティおよび国連関係者に高く評価されており、彼等の関心、評価の差について二重の意味で驚いた。

日本は、資金援助や人道支援という形で、東ティモールの国づくりに貢献している。2002年2月から2004年5月まで、自衛隊施設部隊が国連のPKOミッションに参加したほか、神父、NGOなど、多くの日本人が地道な活動に取り組み成果を上げてきた。

まず、自衛隊が評価された理由は二つある。道路補修や建物修繕、橋の建設やマングローブの植林などを行い、現地の人々に将来の展望を開かせたことだ。もう一つは、日本人特有の優しさ、礼儀正しさが現地の人々の心をつかんだことだ。

神父、シスター、NGOの人たちは、コミュニティに共同トイレを造ったり、ヤシ油を燃料へ活用する方法を教えたりしている。コーヒー豆栽培の技術移転に汗を流す人もいる。それぞれの規模は決して大きくはないが、複雑多岐なニーズに対してきめ細かいサービスを提供しているのだ。

国際貢献という言葉には、人のためにやっているというどこか他人行儀的なニュアンスがあるが、国際公共政策に対する自主的、積極的な参画だ

と理解し直してほしい。つまり、われわれの安全や繁栄に直接、間接に跳ね返ってくるテーマである。

国際貢献に求められる資質とは何か。活動する彼らに共通するのは、現地の言葉を操り、厳しい環境にも耐える忍耐力を備え、現地のニーズにうまく適応できる能力があることだ。

彼らには、自己犠牲を強いられても後悔しない何かがある。それは彼らにとっての居場所ともいえるものだろう。こういう日本人がいることを大変誇りに思うし、今日の講演で、彼らに代わって平和へのメッセージを伝えることができたのなら幸いだ。

(了)

— 注 —

74. 注57. 参照。
75. 筆者と東ティモールでの非政府組織グループが連合して結成したNGOフォーラムの代表とのインタビューに基づく。
76. 注65. 参照。
77. 東ティモール憲法第42条（結社の自由）及び第43条（団結の自由）がそれに相当すると解釈されている。以下を参照ありたい。横田洋三（訳）『東ティモール民主共和国憲法』（中央ロー・ジャーナル第3巻第1号）中央大学法科大学院、2006年
78. 現地のテトゥン語では“malae”（よそ者）。
79. 最近のPKO活動の現状については以下を参照ありたい。“Call the blue helmets,” *The Economist*, 4 January 2007, “A chance for a safer world,” *The Economist*, 4 January 2007